

原発電源地域における文化景観の育成について

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
岩手大学工学部 正会員 赤谷 隆一

1. はじめに

現在全国には、原子力発電所が立地している市町村は18市町村あり、そのほとんどの市町村は、原子力発電所の着工とともに労働人口の増加に伴う地域社会の変化により急激な街づくりが強いられてきた。特に電源三法、各種税収入等により地方財政は急増し、道路、上下水道、教育文化施設、スポーツ施設の整備にそれらはみられる。しかしこれまでに整備されているものは、上述の都市施設に集中し、快適な人間社会を営むために必要な都市景観に対する整備は、ほとんど行なわれていない。都市の機能施設、都市景観双方の調和のとれた発展こそが、快適な街づくりには重要となる。原発電源地域における都市の機能施設、都市景観の整備の差、問題点を明らかにし、文化景観という観点からの接近を試み、原発電源地域における快適な街づくりのモデルをつくらうとするものである。

2. 本研究の目的

福島第2原子力発電所が立地している福島県双葉郡富岡町をケーススタディとした。図-1に研究のフローチャートを示した。すでに昨年までに、イメージ再生法とレクリエーションパーソントリップ調査について終了しているが、文化景観地域形成までは、施設間トリップ数が少なすぎたため致らなかつた。そこで本研究においては、人の行動は、イメージに起因するという考えから、イメージ連想法による文化景観地域形成を試みた。

3. 調査方法および解析方法

調査方法はイメージ連想法を用い、インタビュー法とし、被験者に対し刺激となる項目を与えそこから連想するものを数多くあげてもらった。刺激項目とした要素は、イメージ再生法により「好きなところ」として再生された中から再生率2.5%以上のセミバザリックエレメント(個性豊かな街づくりのためのキーとなるように大切に育成されるべき要素)と特に当時において重要と思われる要素4つを合わせた、表-1に示した24項目である。これらの要素を文化景観地として定義し、図-2に示す。図の数字と記号はすべて表-1に対処している。解析方法は、表-1に示した24項目と、それらを刺激項目として連想された項目のうち頻度の高かった50項目のあわせて74項目について、クラスター分析を適用した。(群間平均法)

4. 解析結果および考察

図-2は24地点の文化景観地を○印で表わしているものであり、大きさはイメージ再生法による調査で再生された再生率を表わしている。また白ぬきは最近の10年間に良くなってきた景観と変化のなかつた景観として再生された地点であり、黒ぬきの地点は悪くなってきた景観として再生されたものである。都市部の整備に対し

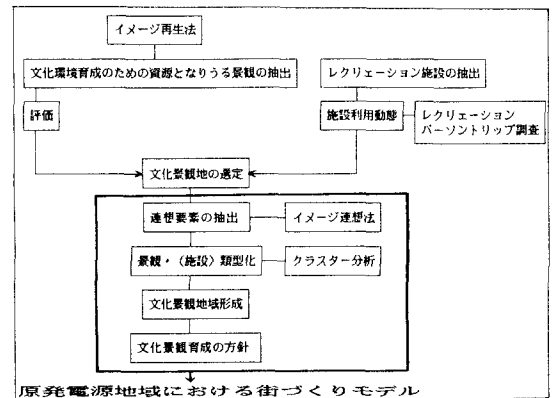


図-1 研究フローチャート

表-1 イメージ連想法における刺激項目および文化景観地

I	A	1. 大倉山	13 館山堤
		2 阿武隈山地	14. 小島浜燈台
		3. 館山神社	15 小島浜漁港
		4. 岩井土蔵集	16 富岡海岸
		5 渡川渓谷	17. 東京電力福島第2原子力発電所
II	B	6. 夜の森桜並木	18 富岡駅
		7. 夜の森公園	19 子安観音
		8 夜の森駅	20 富岡川
		9 夜の森駅つつし	21. 富岡町役場
	C	10 夜の森商店街	22. 中央商店街
		11 富岡公園	23. 総合スポーツセンター
		12. 夜の森堤	24. 総合グランド

周辺の自然景観に対する整備の遅れが知られる。次に図-3にクラスター分析によるデンドログラムを示した。まず、文化景観地とした24のすべての刺激項目が正逆連想の項目が存在してくるまで群化を行なった(太線)ところ、14クラスターとなり、刺激項目間で逆連想をもつ項目が15項目あることが知られた。刺激項目の中で正逆連想をもっている項目は結びつきが密接であると考えられる。正逆連想をもつ刺激項目(=文化景観地)が存在する5クラスター内の文化景観地(=刺激項目)を結びつけ文化景観形成地域として選定することとした。選定をした5地域は、図-4のA:大倉山を中心とする山地、B:夜の森公園周辺地域、C:小良浜周辺地域、D:富岡海岸周辺地域、E:富岡川周辺地域である。(斜線部分)このうち海岸部の2地域C、Dと河川景観Eの3地域については、都市の機能施設の整備ばかりに力を入れたために放置され、その結果として悪くな、まきまいる地域である。特に早急な整備が必要である。C、D地域については荒れて危険であるという指摘もある。A、B地域については、どちらもその利用が春季、秋季に集中(レクリエーションパースントリップ調査より)していることから1年を通してレクリエーション行動に利用できるような整備が必要である。デンドログラムで最後に群化を行なった(細線)ところ、町全体で2つのクラスターに大別された。図-5に示したとおりである。これらはⅠ:自然的な景観、Ⅱ:人為的な景観の2つに大別できると考える。当町において、このように2つに大別されたことは、街づくりを考える上で重要な情報を得たことになる。

クラスター分析で省略した連想項目についても、詳細に検討を加え快的な街づくりのモデルを考えてゆきたい。

参考文献：内藤 敏 他 原発電源地域における文化景観の育成に関する研究
土木学会東北支部研究発表会 1985.3.
賀集 實 連想の機構

1966

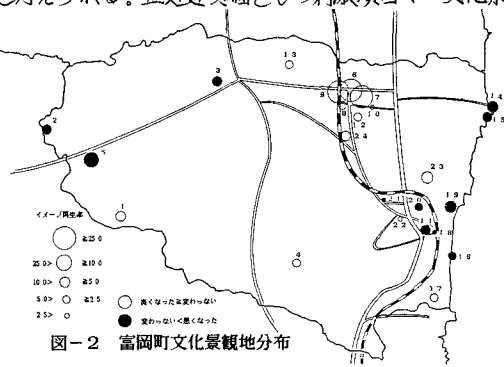


図-2 富岡町文化景観地分布

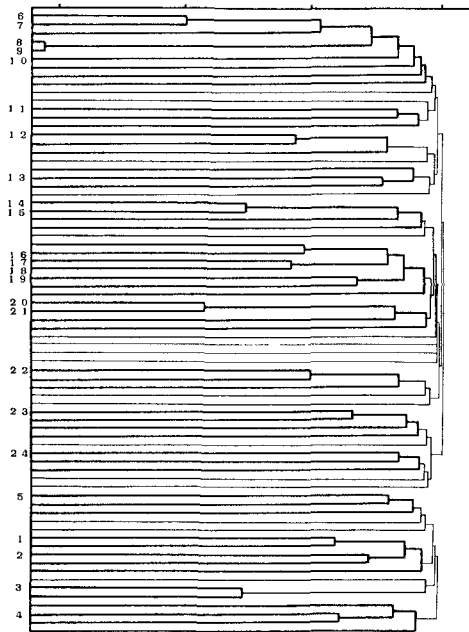


図-3 刺激項目と連想項目のデンドログラム

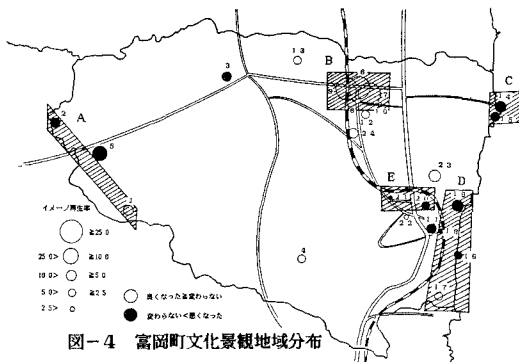


図-4 富岡町文化景観地域分布

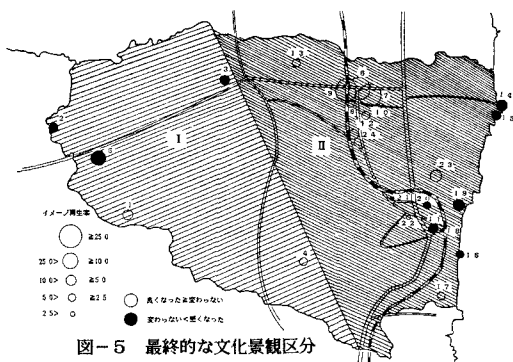


図-5 最終的な文化景観区分